

## 講義 4

# 看護学におけるリプロダクティブ・ヘルスケア ～児童養護施設の思春期女子を対象にした個別ケアの実際～

看護学部

教授 福島 裕子

### 1 はじめに

皆さま、こんにちは。ただ今ご紹介をいただきました、岩手県立大学看護学部の福島裕子と申します。私の専門は看護学です。看護学の中でも、助産師というライセンスを持って、自分自身が助産師として医療現場で務めてまいりました。助産師は命の誕生に関わる専門職です。でも、命の誕生に関わるということは、性と生殖の健康と切り離して考えることができません。そういった私の立場から、普段、皆さんがあまり深く考えることがない性の健康について、私自身が大切に思うことや、実践していることをお話させていただきます。

### 2 Reproductive Health/Right 性と生殖の健康と権利

Reproductive Health は、「性と生殖の健康」と訳されます。1995年の第4回世界女性会議の行動綱領では「Reproductive Health とは、人間の生殖システム、その機能と（活動）プロセスのすべての側面において、単に疾病、障害がないというばかりでなく、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態（Well-being）にあること。人々が安全で満ち足りた性生活を営むことができ、生殖能力を持ち、子どもを産むか産まないか、いつ産むか、何人産むかを決める自由を持つこと」と定義されています。

そして Reproductive health/rights は、「性と生殖の健康と権利」です。

世界女性会議の行動綱領では「全てのカップルと個人が、自分たちの子ども数、出産間隔、出産する時期を自由にかつ責任をもって決定でき、そのための情報と手段を得ることができる権利」「差別や強制や暴力を受けることなく、生殖に関することを決定できる権利」と説明されています。

もう少し若い世代に引き付けて考えると、性行為をするのかしないのかを自分で決めること、相手や避妊の有無や方法を自己決定するということです。相手に言われたから仕方なく、嫌われたくないから、と同意するのではなく、自分自身で選択するのです。そして、嫌なときや、嫌なことには「嫌」と言えるということです。

デート・ドメスティックバイオレンス（DV）は、恋人同士に起こる暴力行為です。暴力と聞くと、殴る蹴るの身体的暴力をイメージするのですが、心理的な暴力や支配、性的な暴力もあります。相手が嫌だと思っているのに、無理やり性行為を強要したり、避妊をしてくれなかったり、というのも性暴力です。そういうときに、自分で行動を決定し、嫌なことは「嫌」と言える両者であることが望ましいわけです。

男女平等ではありますけれども、生物学的には、妊娠・出産は女性にしかできません。女性は、妊娠をして出産をするための体の構造とメカニズム、機能を持っています。ですから、身体学的な性の健康問題には男性とは異なる女性特有のものがあるのです。女性たちの産むところだけのお手伝いではなくて、妊娠・出産や育児だけではなく、産むための機能と構造を持っている女性特有の健康問題を支援するのが、私の専門の助産学です。すべての女性たちは、産む産まないを自分で決定する権利がある、健康に、安全に、次の世代を出産できるよう支援を受ける権利がある、性行為に伴う予期しない妊娠や性感染症を避け、性暴力や支配を受けない、そういったことが、「Reproductive health/rights：性と生殖の健康と権利」になります。

Reproductive health/rightsを支えるのは、性に関する正しい知識や自

分自身の体の理解です。女性であれば自分自身ですけれども、男性であったとしても男性の体、そして自分のパートナーである女性の体の特性をちゃんと理解することが、自分で決めることを後押しします。そしてさらに大切なのは、自分を受容し大事にしたいと思う気持ちです。Well-beingの状態にいることは、自分を受容して自分自身を受け止め、自分を大事に思いながら、自分をコントロールできるということです。それが基盤にあることで、私たち人間は、他者ともいい関係を築くことができるわけです。

私は、自身の実践を通して、Reproductive Health/Right を達成するために、とても大切なのは、“自分を受容し大事にしたいと思う気持ち”だと実感しています。

### 3 児童養護施設での実践

では、ここから私の実践のお話をさせていただきます。

「私なんか生まれてこなければよかった」「死にたいな、死にたいなっと思う。自分は居なければいいって」これは私が児童養護施設で、性の健康指導や保健指導で出会った思春期の女の子たちの言葉です。

児童養護施設というのは、家庭で育つことができない子どもたちが生活をしている場所です。平成24年度には、およそ3万人の子たちが児童養護施設で生活をしています。その約6割が「虐待経験あり」の子どもたちです。虐待の中でも最も多いのがネグレクト、つまり育児放棄で6割以上、次いで身体的虐待、そして少数ですが性的虐待もあります。

### 4 虐待を受けて育った子どもの特徴

私たち人間は、生まれてから養護してくれるお父さん、お母さんとか、それに代わる大人に育てられます。例えば、生まれてすぐの赤ちゃんはおなかが減ると泣きます。おむつが汚れて気持ち悪いと泣きます。眠くなって、抱っこしてほしいと思うと泣きます。その泣いたサインで、養護する

親、お母さんが「どうしたの」と抱き上げて、「おなかが減ったんだね」と言って、おっぱいをあげたり、「ああ、おむつ気持ち悪いね」と言って、おむつを替えてあげます。そうすると子どもは、この人は自分を守ってくれる人なんだという愛着が徐々に育っていきます。愛着は、自分を保護してくれる人を信頼して、サインを出して返してもらおうという相互作用から徐々に育っていくものなのです。

でも、虐待を受けた子どもは、自分が信頼している親から何度も何度も裏切られる経験をします。そうすると、他者を信頼する気持ちや、すっぱり包まれて安心する感覚が欠如します。いろいろなサインを出しても裏切られ、傷つけられ、トラウマを抱えます。

精神科医のジュディス・ハーマンは、継続的な虐待や性的暴力、戦争体験などでもものすごく大きな心の傷を抱えると、人間は、基本的な自己感覚が低下すると述べています。つまり、自分の身体とは思えない、自分自身が本当に自分だという認識ができなくなるのです。

私の知り合いで、実のお父さんから性的虐待を受けてきた方がいます。彼女は「自分が実の父親に性的虐待を受け始めたのは13歳だったが、そのときから、“私”というものがなくなった」と言っています。自分の体であり、自分自身であるはずなのに、虐待経験を受けることで、自分がなくなってしまうという経験をします。そして他者への恐怖や強い怒りなどの感情の自己調節がうまくいきませんので、Well-beingの“他人を尊重する”という関係も結ばれません。そして自分自身を大切に思う気持ちもなかなか持てなくなってしまうのです。

## 5 児童養護施設の思春期女子の Reproductive health の問題

虐待を受け施設の中で育った子どもたちは、性交経験が早くて、性交人数も多く性感染症やエイズなどのリスクも大きいことが報告されています。特に女子の場合は、主体性がない受容的な性行動や、望まない妊娠、若年出

産が同年代の家庭で育つ女子よりも多い現状です。また、施設を退所した後に、貧困や社会的な孤立などの寂しさから、安易な性行動や、望まない妊娠、デートDV、離婚、シングルマザー、虐待などにつながる可能性も高いといわれています。

15年くらい前に、私が学生を連れて実習でお邪魔していた児童養護施設の先生から、入所している高校生たちの性行動が活発になってきて、このままだと妊娠してしまうかもしれない、病気がうつされてしまうかもしれない、どうか専門家として避妊の話や、性行動に伴うリスクの話をしてくれないかと頼まれたのです。「いいですよ。性の話は専門家ですからお伝えしましょう」とお引き受けしたことがきっかけでした。性の健康問題が、児童養護施設でもクローズアップされてきましたけれども、なかなか日常のお世話をしている施設の職員の人たちには、性の話題は抵抗があります。私は助産師でしたので、体や性についてのお話ができるということで、若い女の子たちに関わり始めました。

## 6 児童養護施設での女の子教室

集団指導では助産師仲間たちと「女の子教室」を実施しました(写真1)。手づくりの教材を使用して、あなたたちの身体は今、どういう構造になっているのかをお伝えします。女性は思春期になると月経という現象が起きます。普通であれば、家庭でお母さんが、月経時の手当てや下着やナプキンの種類などの初経教育をきめ細やかに1対1対でするのですが、施設の女の子たちは母親と一緒にではないので個別の指導には限界があります。そこで助産師の私たちが、ナプキンの種類や当て方、もしも血がついてしまったら、パンツはどうやって洗うかも、実践的にいろいろなものを見せて伝えま



写真1  
女の子教室の様子

した。そして月経が嫌なものではなく、女性の身体に起こる素敵な出来事だよ、というメッセージを伝えます。「月経」という身体現象は、女性が女性自身であることを自覚する出来事です。それを肯定的に捉えることは、女性である自分を受容することであり自分を大切に思う気持ちにつながるのです。そして、基礎体温や避妊の具体的な方法や、性感染症の予防方法などを女の子たちに専門家として伝えます。性に関することは自分で決めていいこと、嫌なことには「嫌！」と言っていいことなど、女性である自分自身を受け入れ、自分を大切にしながら成長してほしいという助産師としての願いを込めてお話しします。



写真2  
ナブキンやショーツの実際を学ぶ

## 7 児童養護施設の思春期の女子への個別指導の実践

集団だけでは、個別のいろいろな悩みが聞けませんので、一人一人に個別に関わり、からだだけではなく、恋愛や自分のことなど、お話を聞きながら相談に応じる、という継続したリプロダクティブ・ヘルスケアも実践してきました。そのような実践の中で、出会ったAさんは、義理のお父さんから性的虐待を受けてきた高校1年生の女の子です。この子は義父とお母さん実母と暮らしていて、小さいころは殴ったり包丁を突き付けたりという身体的暴力でした。彼女が第二次性徴を迎えて、思春期になったころから性的虐待に変わりました。でも、彼女はそれを実母に言えなかったのです。なぜかと言うと、義父と再婚をして実母は幸せになりました。実母は男性依存的な女性だったので、義父と別れると実母は一人で生きていけないことを彼女なりに感じ取っていて、なのでずっと言えずに自分一人で耐えてきたのです。高校1年生のときに、担任の先生にぼろっと打

ち明け保護された事例でした。

彼女が生活する施設の先生から「半年前に入所してきた A さんは、すごく性行動が活発で大変なんです。妊娠されても困るから指導してください」というお願いがありました。私は性的虐待の被害者であることを知らないふりをして、A さんと関わり始めました。同級生の特定の方とお付き合いをしているのですけれども、性行動が活発でした。近所の公園の公衆トイレの中や、学校の体育館の用具置き場、体育館に入るコンクリートの階段の上でもセックスをしていました。そういう彼女に妊娠の仕組みや避妊の具体的方法などを伝えました。何度目かの面接時、彼女は義父から性的虐待を受けてきたことを私に打ち明けてくれました。その時私は「そういう経験があったら、彼とのエッチは嫌じゃなかった？」と聞きました。彼女は「彼とのエッチはお父さんのと全然違う。彼とエッチをしていると、お父さんとの記憶が上書きされるような気がする」と言ったのです。義父とのつらい経験を忘れたい、打ち消したい、という彼女なりの理由があったのです。つまりいくら避妊などの知識を提供しても、根底にあるのは自分自身をどう思っているかです。自分をどうしたいかという気持ちがなければ、行動は変わらないということを、彼女から教えてもらいました。

同じように中 3 の女の子 B さんも性的虐待を受けてきた子です。中 3 の同級生の男の子に「やらせろ、やらせろ」としつこく迫られたから、気持ちもないけれどもやらせてやった、と言いました。自分の基本的身体感覚が自分の心から遊離したところにあるようなかたちで性行為を経験している女の子でした。彼女もつらいことがあると、リストカットなど自分の体を傷付けることで自分自身を確認していました。それと一緒になのです。

私は最初、性の健康問題の知識提供や、保健指導のために児童養護施設に助産師として入らせてもらいましたが、この実践を通して強く感じたのは“必要なのは知識だけでない”ということです。知識を提供するというのは、1 つのきっかけでしかありません。もっと必要なのは、この子たち

自身が自分自身を大事に思う気持ちに少しでも向くようなアプローチが大事だということを、実践を通して教えてもらったのです。

## 8 児童養護施設の思春期女子を対象としたリプロダクティブ・ヘルスケアモデルの開発

私は、今、児童養護施設の女の子たちを対象としたリプロダクティブ・ヘルスケアモデルの開発に取り組んでいます。身体を理解や性の健康問題に関する保健指導を助産師として伝えながら、女子たちが自分を大事にしようと思う気持ちを高めていけるようなケアモデルです。

先ほど来、児童養護施設の子たちのネガティブな側面ばかりを言ってきました。実は、私は逆の意味で、私が想像もつかないような逆境を生きてきた子たちだからこそ力や強さを持っていると感じます。そのパワーがどこから出てくるのかと思

### 「児童養護施設の思春期女子を対象としたリプロダクティブ・ヘルスケアモデルの開発」

目標：

自分は大切な存在なんだ、自分を大切にしよう、と思える。

- ◆ 助産師として、女子自身の身体に目を向け、母親のようにいたわり、必要なケアをする(基本的自己感覚の回復)。
- ◆ 否定しない。安心の場、受け入れられ、認められる場とする。(自分だけを見てくれる空間、特別な“えこひいき”)
- ◆ 素敵などころ、頑張ったところ、変化した点などを積極的に伝える。(ポジティブシャワー)
- ◆ 女性の生き方を共に考える(成人女性のモデルとなる)

うほど、生きる力が内在しています。そういう部分を少しでも引き出したのです。助産師として、彼女たち自身の体に目を向けて、お母さんのような立場で、「生理はどう?」とか、「おなかの痛みはどう?」ということを聞きながら、必要なケアをします。これによって、基本的な自己感覚が戻ってくると期待しています。とにかく、否定をせずに、安心の場、受け入れられ認められる場として、私みたいな外からの他人が関わるそのひとときだけでもいいから、自分のことを心配してくれている、自分のことを大切に思ってくれている、自分のことをわかろうとしてくれている……

そんな特別な“えこひいき”が経験され、安心できる場所を提供します。そして、頑張ったところや、変化したところは、積極的に言葉にして伝えていきます。この子たちは高校を出ると同時にもう施設を出なければいけないのです。嫌でも社会に出て働かなくてははいけません。そういう中で、私と向き合いながら、女性の生き方を考える場をつくります。

個別で関わる時には、ほとんど恋愛や友人関係のおしゃべりです。ですから身体の話は時々しかしません。でも 100%とにかく話を聞いてくれるおばさんみたいな人がいるだけでも、特別なえこひいきの場になって、いっぱい認めてもらえる経験が、少しでも彼女たちの未来に向ける何かになってもらえたらなど、私自身は今、実践をしているところです。

## 9 私をここまで導いてくれた出会い

私をここまで導いてくれた出会いをご紹介します。

最初に、実母の恋人から性虐待を受けて、児童養護施設で暮らした D さんです。出会ったのは D さんが高校 2 年生のときです。彼女は、実母の恋人からレイプされた経験を持っていて、施設で育っていたので、お母さんに対して愛情を求める気持ちと、自分を守ってくれなかったという憎しみの気持ちが、いつも渦巻いていて、怒りになっていた子でした。

施設を退所した後、2 年くらい行方不明になっていたのですけれども、偶然再会しました。「あら、D ちゃん」というところから、付かず離れずの関係がスタートいたしまして、その間、彼女は結婚をして、ドメスティック・バイオレンス（以下 DV）の被害を受けて離婚をして、またシングルになるという紆余曲折がありました。

彼女は施設を退所して社会に出たばかりのときは、DV の被害に遭うことがすごく多かったです。性虐待を受けた人は、自分をまた同じような状況に置こうとするのです。そうしながら、あのとき自分はなぜそうなったのか、なぜそれにあらがえなかったのかみたいなことを常に問いかけてい

るというのがありますし、個別の理由がいろいろあります。彼女もそういうポジションに自分を置いてしまう人でした。自分自身の意思を持たずに、相手の男性の言いなりになってばかりいる子でした。しかし、子どもたちをシングルマザーで育てる中で彼女は変化しました。経済的には決して豊かではなくて、むしろ苦しいほうなのですけれども、男性に依存することなく、自分は子どもたちがいるから、今自分がいるんだと、私にはっきり言えるようになってきました。

彼女は、自分なんかいなくてもいいのにということを、何度も何度も私に言う子だったのですけれども、10年以上たって、自分の子どもができて、自分自身の存在感を少しずつ持ってきたのかなと思うのです。だから、人間はやはり自分の存在の意味を確認できると強くなれるのかなと、Dさんを通じて今も教わり続けています。

もう一人、Eさんです。彼女はもうつながりがなくて、元気かどうかは分からないのですが、彼女は幼少期から実のお母さんの虐待を繰り返し受けてきた子でした。虐待を受けては施設に入り、またおうちに戻っては、また虐待が始まって戻る生活を繰り返している子でした。

私と出会ったのは中学2年生のときで、私に「おなかが痛いんだよね、最近ね」なんていう話から関わりが始まりました。Eさんは、「私はお母さんのようになりたくないし」と言うときもあれば、「私はもうどうでもいい」とか、自分の将来のことをすごく投げやりに話す子でした。未来をポジティブに考えることができない子でした。そして、自分の本当の気持ちを素直に言えなくて、相手を逆なですするような行為…つまり「試し行動」をしながら、自分に気持ちを引き付けることをする子でした。彼女は虐待を受けて、たくさんの人から信頼を裏切られる経験をしてきていましたので、「試し行動」ということをするのです。この人は本当に自分にどれだけ本気で関わってくれるのだろうかということを、知らないうちにそういう行動でためすのです。私も、Eさんの試し行動を何度も経験しました。そ

れがあったから彼女との信頼関係が少し深まったと言えます。

高校生になって久しぶりに会った時、彼女は私にこういうことを言ったのです。「ねえ、ふくちゃん、私、福祉の道に進みたいと思うんだけど、どんな学校があるの?」と聞いてきたのです。Eさんが未来のことを考えていて、どうしたんだろうと私は思いました。

施設の先生に、「ちょっと久しぶりにEさんと会ったら、こういうことを聞かれたのですけれども、何かあったのですか」と聞いてみたのです。Eさんの17歳の誕生日がついこの前あったのですが、その17歳の誕生日に、実のお父さんが施設を訪ねてくれたらしいのです。Eさんは、本当のお父さんは籍が入っていないのです。お母さんにたくさんの男性がいましたので、たくさんの異父兄弟がいて、戸籍上のお父さんは義理のお父さんでした。誕生日に訪ねてきた実のお父さんは「これは君のためにためていた学資保険だから使ってくれ」と言って、Eさんにプレゼントをしたのです。Eさんにとっては、本当のお父さんが私にいた、ということが確認できた出来事でした。

それから、その誕生日のころに、Eさんが児童養護施設に来る前いた乳児院の担当だった保母さんが訪ねてきてくれたのです。「この前、荷物を整理していたら、あなたの赤ちゃんのときの写真が出てきたから、あげるよ」と届けに来てくれたのです。Eさんは、自分の赤ちゃんのときの写真を1枚も持っていません。施設では整理してお母さんに渡すのですけれども、結局、おうちではそういうものは管理できないので、自分の赤ちゃんのときの写真がなかったのです。その写真を保育士さんが持ってきてくれて、自分の赤ちゃんのときの写真を目にしました。

そして、そのときに保育士さんが、こういう話をEさんにしてくれたらしいのです。「Eちゃん、あなたが乳児院にいたとき、私は妊娠中だったから、仕事を辞めようかどうしようかなと悩んでいたのよ。」と。保育士さんが、仕事をどうしようか悩んでいた時期に、乳児院に行くと、自分

の担当だった E さんが、とことこ、とことこ追いかけてきて、自分が勤務が終わって帰るときには、泣いて、行かないでってせがむんだそうです。保育士さんは E さんに伝えました。「E ちゃんがそういうふうに私についてきてくれたから、私は保育士を続けようと決心したんだよ。今、私が保育士を続けられているのは、E ちゃん、あなたのおかげなの。あなたのおかげで、今の私がいるのよ。ありがとうね。」と、その写真を見せながら彼女に言ったそうです。E さんのように虐待経験のある子は、めったに泣いたりしません。私に「お母さんにさ、洗面器で頭バツコンだよ」なんて、にこにこ笑いながら話すのです。その E さんが、写真を見せてもらって、「あなたがいたから、今の私がいるのよ」と保育士さんに言われたとき、ぼろぼろ泣いたそうです。

彼女は、今まで自分なんかいなければいいのにといい思いで生きてきました。でも E さんはこのとき、自分がいたことでこの保育士さんの今があるんだ、そして、実のお父さんが自分のためにお金をためていてくれたんだという、自分の存在を初めて認められる経験をしたのです。その後、私に「福祉の道に進もうかなと思うんだけど」と言ったのです。

私は、この E さんから、人間は自分自身の存在が認められる、自分であることを人から認められることが、本当に生きる力になるんだなと教わることができました。

## 10 あなたは大切な存在

何年か前の公共広告機構で、こういうフレーズがありました、「命は大切だ。命は大切だ。そんなこと何千何万回言われるより、“あなたが大切だ” 誰かがそう言ってくれたら、それだけで生きていける。」一般論ではなくて、今、目の前にいる、あなたが大事な存在なんだよ、あなたがいることで、いろいろな人が今ここで幸せに生きているというメッセージを成長していく若い人たちに、いっぱい、いっぱい伝えていけたらいいと思い

ます。ここにいらっしゃる全ての方たちの命はみんな望まれて、祝福されて生まれてきた命なのです。

図1はアブラハム・マズローという心理学者が述べている、欲求階層説というものです。人間には、幾つかの欲求が階層になっていて、それをクリアしていった、最終的に自己実現できるということを、マズローは述べています。最初が生理的欲求です。ご飯を食べるとか、睡眠などです。次が安全の欲求です。そして、愛と所属です。自分がすっばり愛され、受け止められて、居場所があるということがあって、初めてセルフ・エスティーム、自分自身のことも、他者のことも認めてあげることができ



図1 マズローの欲求階説

きます。そして、自分の夢をかなえるという自己実現に行くということなのです。

おぎゃあと生まれてから、私たちは、まずおなかが減ったらミルクがもらえて、安心して守られている感覚があって、すっばり愛されて、大事にされていることの経

験を積み重ねてくるから、自分を尊重することができます。そして、自分が大切にされ、自分自身も自分を大事に思えることで、自分らしい目標を持った人生を生きることができるのです。

助産師として私が実践しているリプロダクティブ・ヘルスケアは本当にささやかな実践です。決して母親の代わりになることはできませんが、これからも女性の先輩であり助産師という専門家として、思春期女子のからだの健康管理や避妊などの知識提供と共に、「あなたは大切な存在だよ」と伝え、自分を大切にできるための支援を模索していきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

## 【文献】

内閣府男女共同参画局：第4回世界女性会議行動綱領（総理府仮訳）、1995. [last access 2018.Jan.6] Available from :

[http://www.gender.go.jp/international/int\\_norm/int\\_4th\\_kodo/index.html](http://www.gender.go.jp/international/int_norm/int_4th_kodo/index.html)

厚生労働省雇用均等・児童家庭局：児童養護施設入所児童等調査結果（平成25年2月1日現在）、2015. [last access 2018.Jan.6] Available from :

<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11905000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Kateifukushika/0000071184.pdf>

Judith Herman : Trauma and Recovery: The Aftermath of Violence—from Domestic Abuse to Political Terror , Basic Books, 1997.

J.L.ハーマン著，中井久夫訳：心的外傷と回復<増補版>、みすず書房、1999.